

# 児童生徒指導の原点を求めて

第二中学校	水戸部	芳	造
西	屋	常	夫
第三	笠	洋	夫
坂西	長	公	二
山辺	太	田	久

## 1 児童生徒指導を支える人間観

児童生徒指導について考えるとき、教師自身がどんな人間観に立って生きているのかが明らかにされなければならない。教師の人間性を抜きにしては、児童生徒指導は成り立たないからである。つまり全職員の児童生徒指導に関する共通理解が得られないばかりか、教師自身の人間観と指導内容と方法技術が首尾一貫しないものとなるからである。

教師は、ひとりひとりの児童・生徒の人間性を手段としてではなく目的として扱わなければならない。児童生徒指導は内在的価値をもつ個人の自己実現を援助することである。人間は社会的存在であるから、個人の自己実現は、完全に自由であることはあり得ない。常に社会的価値との関連においてなされるものでなければ孤立してしまう恐れもある。責任をもって社会的存在として、人生いかに生きるべきかを主体的に考え、自己の目標を設定して、それを専心追求していく存在として児童生徒をとらえてみた。しかし、要因によっては、問題行動に走る可能性はだれもがもっているものとみなければならないだろう。

児童生徒指導は、児童・生徒の自己実現を目的とするものではあるが、アメリカの心理学者マスローによると「自己実現の欲求が明確に現われるのは、通常、生理的欲求、安全、所属と愛、承認の欲求が前もって満たされた場合である。」とされている。したがって、以上のような欲求を配慮しないで自己実現を目指しても、指導の効果はあがらないであろう。

## 2 児童生徒指導の本質とはなにか

児童生徒指導は、学校がそれぞれ樹立している教育目標を達成するため、学校の全教育活動を通して行われる重要な教育機能である。したがって、児童生徒指導は領域としてではなく、機能として存在するわけである。特別活動の中の学級指導は、計画的、組織的な援助指導の徹底を図り、学校教育全体で行われる生徒指導の機能を補充し、深化し、統合する場として生徒指導のいっそうの充実を図らなければならない。また今までの児童生徒指導を考えると、問題をもつ児童生徒を対象としたものから出発し、全児童生徒を対象とした援助指導へと進められた傾向がある。しかしひとりひとりの児童生徒は、役割こそ異なるが、ただひとりしかない価値ある存在として、さまざまな潜在的 possibilityを持っています。その可能性を援助指導によって、潜在能力を顕在化することが生徒指導の目指すところであり、その役割を果たすのが教師である。

児童生徒指導は、ひとりひとりの人間の価値を尊重するものであって各個人の心に内在された、知情意の総合されたものが行動としてあらわれ、そのよりよき発達を援助することである。

以上のことから、児童生徒指導はすべての子供が人種・性別、家庭の状況や成績の優劣によって差別されることなく心身の健康の維持増進を図れるようにすることであり、その活動もまた統合されたものでなければならない。児童生徒指導は、形式的な理論を児童生徒にあてはめて考えるべきでなく、目の前にいるすべての児童生徒を、あるがままに理解し、児童生徒の立場に立って積極的に援助指導することであり、終局的には児童生徒が社会の一員として、それぞれの立場で自己実現が図られるよう援助指導することである。

### 3 児童生徒指導の方法

#### (1) 学級指導と生徒指導

中学生の場合、生徒は心理学的には、いわゆる青年期にはいり、心身の急激な発達や成長を示す時期である。そのため生徒はさまざまな不安や悩みに動搖しやすくなる。その不安や悩みを解消してよりよき適応性を身につけさせる指導を意図的・計画的に行なうのが学級指導である。そこで学級指導における学業指導についての実践例を示し参考に供したいと思います。

#### 「学級指導」指導案（足二中藤本教諭指導資料による）

##### 1 題名 学習方法の改善

##### 2 題材設定の理由

比較的明るいクラスで、屁託がなく笑いが絶えない雰囲気だが、クラスの相当数の者がそれぞれに勉強について、悩みやつまづきを持ち、彼らなりに深刻にうけとめている。また、二学期の半ばを過ぎて、学力の格差も徐々に広がりつつある。そこで中間テストの実施時期でもあるので、過去の自分の学習状態を考え、みんなで失敗例や成功例を出しあうことにより、学習方法を改善し、学習の向上を図る意欲を喚起させるため、本題材を設定した。

##### 3 目標

学習のつまづきや悩みを追求させ、それらの解決方法を考えさせることによって、自己の学習方法の改善を図り、積極的に学習に取り組んでいこうとする意欲を高める。

##### 4 指導計画

1. 事前調査 イ 好きな教科・嫌いな教科  
ロ 中間テストをどのように勉強したか } 学級の時間

ハ その結果と今後の課題 ————— → 1 時間

2. 学習方法の改善 ————— → 1 時間（本時）

3. 個別面接 22日、24日、25日の5、6時間（学校計画）

##### 5 本時の指導

- (1) 題目 学習方法の改善

- (2) ねらい

友だちの発表や質疑、意見、話し合い等を通じて、自分の学習方法の欠陥を知り、よりよいものにしようとする意欲を育てる。

- (3) 資料 ア プリント（一学期を省みて、二学期になって、中間テストをどのように

- 勉強したらよいか、反省と対策)
- イ プリント（中間テストをどのように勉強したか、抽出プリント、調査結果）
- ウ 個人面接資料
- エ 中学生の進路（P41～P48）望ましい学習をするために

#### (4) 展開

指導内容	学習活動	指導上の留意点
・本時の目標、確認	・本時の内容を知る。	・赤鉛筆でチェックしながら反省させる。
・各自の資料の検討	・配布された各自の資料プリントを見て「過去の反省・決意」が現在生かされているか検討し、自己反省をする。	
・プリント（抽出生徒の資料など）の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦二、三の生徒の発表を聞く。</li> <li>◦プリントを読んで、自分のものと比較検討し自分の考えをもつ。</li> <li>◦抽出生徒の発表を聞く。</li> <li>◦質疑応答 (抽出生徒と一般生徒)</li> <li>◦参考になった点など感想を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦自由な発表を意図する。</li> <li>◦テストのための学習方法でないことを強調する。</li> <li>◦適宜バックアップする (抽出生徒の1名が吃音であるため。)</li> </ul>
・共通する「学習方法の改善」の討議	◦改善すべき学習方法についてグループで話し合う。	◦必要に応じて「調査」にふれる。
・授業中	◦各グループで発表する。	◦時間の関係で重複をさける。
・家庭学習	◦板書された項目のうち、各自必要なものと思われるものをメモする。	◦板書補足説明
・教師の集約	◦「継続は力なり」「学問に王道なし」という諺の意味を知る。	◦諺の解釈でなく「努力」「継続」の必要性を握させることに重点をおく。
・むすびと今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦改善すべき自分の学習方法をは握する。</li> <li>◦個別面接についての話を聞く。</li> <li>◦教育相談の必要性を知る。</li> </ul>	

#### (5) 評価

- 学習方法を改善することにより、学力向上させようとする意欲をもったか。
- 教育相談などを通して、適宜改訂して一層の向上を図ることが理解できたか。

#### 6 事後指導

- (1) 個別面接（教師・父母・生徒）において各自の学習上の悩みについて、つきづきの解

決を図る。特に必要な生徒は今後の「学級の時間」等を通じて解決を図る。

- (2) 家庭学習計画表（一学期作成）の是正をする。
- (3) 学級指導と他の領域との関連を図る。（進路に関する指導など）
- (4) 教育相談への発展を図る。

以上のように学習方法を改善することによって理解度が高まり、教科学習に興味がわき、やる気がおきる動因ともなり、楽しい学級の雰囲気も生れてくるのである。

## (2) 学級担任のおこなう生徒指導

生徒指導を進めていくにあたって、その直接の推進役は、学級担任教師であろう。小学校はもちろん、教科担任制のもとで教科の学習活動をおこなっている中学校の場合においても、学級は学校生活の基礎的な集団活動をおこなうことは、生徒と教師、生徒相互の心の触れ合いが基盤になっている。学級の生徒と最も多く接する機会をもつことができる担任教師は、種々の点について生徒をよく知っている。したがって、生徒指導を計画的、継続的に進めるには、学級担任が最も適しているといえる。その担任教師が毎日繰り返し指導している生徒指導の内容として次のことが考えられる。登下校時の安全指導、日直指導、係活動の指導、給食指導、保健衛生指導、清掃指導、相談活動等々がある。これらの教育活動は、どれも生徒と密着した積極的な生徒指導である。前章でも述べたように、生徒指導は、単なる非行対策だけでなく、ひとりひとりの生徒を対象にした人格のよりよき発達の援助こそ重視しなければならないといえる。積極的にすべての生徒の人格のよりよき発達をめざすとともに、学校生活がひとりひとりの生徒にとって有意義で充実したものになるようにすることこそ本来の積極的生徒指導であろう。そこで、学級担任がおこなう積極的生徒指導の一試案として「短学活における生活ノートの活用」を紹介することにする。

### ア 生活ノート活用のねらい

- (オ) 学校における一日の生活を自己評価することにより、生徒ひとりひとりが日々の生活をすなおに見つめ、自己の現在あるがままの姿を正しくは握し、そのあるがままの姿をすなに受け入れる態度を育てる。（自己理解、自己変容）
- (イ) 今日から明日へのつながりを重視し、忘れ物の防止、学習準備を確実にし、意欲的な生活への変容を期待する。
- (ウ) 生徒が教師に投げかけてくる悩みや問題を早期に発見でき、担任教師の援助書きにより、生徒と教師の対話の場となる。
- (エ) 生活ノートの活用により、以前より目的的な生活ができるようになり、計画的な生活設計をおこなう態度を育てることができる。
- (オ) 教師側からみれば、生徒理解に役立ち、望ましい生徒指導の展開が期待できる。

### イ 生活ノートの記録のしかた

このノートは、生徒自身が自分にむかって書き、教師が採点したり、評価したりするものではない。

生徒は、

- (ア) 一日の生活の中で、何があり、何が起ったかを記録する。
- (イ) 一日の生活をふりかえって、各教科の学習や生活行動を反省し、○×△等で自己評価をする。すなおな態度が要求される。
- (ウ) 今日から明日へとつないでいくために、教科の準備や課題などをこまかくメモをする。
- (エ) 一日の生活の中から考えたこと、感じたことを綴り、豊かな生活へのステップとする。
- (オ) ときどき担任の先生に見ていただき、援助書きをいただく、対話の場となろう。

#### ウ 生活ノートを書く時間

毎日おこなわれる帰りの短学活において記入する。

できれば、学校ごとに、自校に適した独自な生活ノートを作成し、全校的活動として実践を積み重ねることが望ましい。

#### エ 生活ノートの一例

(ア) A案……教科の準備や課題を中心とした生活ノート

月 日 (曜日)		月 日 (曜日)	
明日の準備・課題	1.	1.	
	2.	2.	
	3.	3.	
	4.	4.	
	5.	5.	
	6.	6.	
反省		反省	
反省		反省	
反省		反省	

(1) B案……教科の学習と生活行動を含めた総合的な生活ノートの一例

		5月10日	曜日	天気( )		
	教科	学習内容	評価	課題、準備		
1	数学	一次関数のグラフ	○			
2	英語		△	Step5の新出単語を調べる		
3	体育		×			
4	音楽		×			
5	理科		○			
6	技術		○			
諸連絡						
今日の生活をぶりかえつて	項目	評価	項目	評価		
	1 明るいあいさつができた	○	6 安全な生活ができた	○		
	2 朝学習がしっかりとやれた	×	7 ものをたいせつにし、きまりが守れた	○		
	3 チャイムとともに行動ができた	△	8 忘れものがなかった	△		
	4 友だちと仲よく生活できた	○	9 進んで清掃に取りくんだ	△		
	5 積極的に学習した	△	10 積極的に係活動をやった。	△		
考えたこと・感じたこと						

以上、「短学活における生活ノートの活用」についての一試案を紹介したが、ノートの形式、内容、方法等はいずれにせよ、生徒ひとりひとりが書くことによって、自己の生活をじっくり見つめ、現在あるがままの姿をすなおに受けとめ、自己理解、自己受容をおこない自己開発、自己指導を図っていくことが究極のねらいである。こうした教育実践を積み重ねていく過程で、学習活動の意欲化、友だちとの温かい心の触れ合い、規律ある行動、明るく楽しい学級づくりなど、望ましい個人の変容と集団の変容を期待したい。このように、ひとりひとりの生徒を対象にした教育活動を忠実に実践することにより、自然に非行化防止として効果をあげることになるであろう。

(3) 授業時の生徒指導

ア 教師の授業時の構え

授業を通して「ひとりひとりの児童生徒の可能性の発見と能力の伸長により人間性の育成を図る」ことが重要なねらいであるから、授業者は当然、学校教育目標を具現化した指導案を準備し、指導する児童生徒をよく理解して教室に向わなければならない。以下、授業に学校教育目標を生かすにはどのようにすればよいのか、児童生徒を理解するにはどのような方法があるのかを述べてみたい。

(ア) 授業に学校教育目標を生かすには、

- 学校教育目標 (例) 小二、社会科指導 初等教育資料 1976. 16334 より、

学校教育目標	「進んで学び、みんなで生活を創造する子ども」
具体目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 確かな学力をつける</li> <li>• 仲よく助け合う</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 積極的にものごとにとりくむ</li> <li>• からだをきたえる</li> </ul>

上記の学校教育目標を生かす基本的な施策を教科、領域にわたって設定し、経営として指導に日常化する。

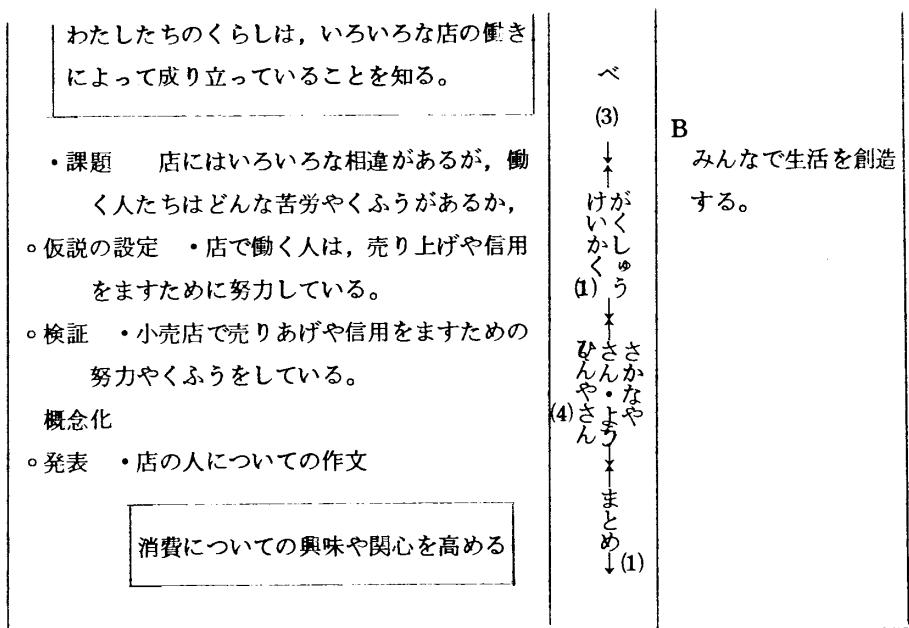
社会科経営の基本的施策

- ア 学習過程の構造化にもとづいた指導
- イ 社会事象に触れることの重視
- ウ 児童の作品の活用

• 学校教育目標と社会科指導の基本的施策

- ア 学習過程の構造 小2年单元 「みせではたらく人」
- (ア) 単元の価値 略
- (イ) 教材構造 略
- (ウ) 学習過程の構造 (9時間)

学習過程 主な活動	小単元	学校教育目標
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 課題は握</li> <li>• 目的意識をもつ</li> <li>• 児童の買い物の経験をもとにして、店で働く人について学習することを知り、意欲をもつ</li> <li>• 具体的事象にふれる</li> <li>学校の近くの店の見学、絵地図に表現する</li> </ul>	↑ お み せ し ら	<p>A</p> <p>積極的にものにとりくむ姿勢</p>



#### イ 具体的事象に触ることの重視

見学により社会事象を提示し、その本質に触れる機会を提示することにより、意欲的に学校目標でいう「積極的にものにとりくむ姿勢」（学習過程A）を生むことになる。

見学の後、私たちの生活はいろいろたくさんの店のはたらきによって成り立っているという共通課題をもち、ここにおいて児童は積極的に学習にとりくむだけでなく、学校教育目標にいう「みんなで生活を創造する」（学習過程B）課題を追求する。

#### ウ 児童作品の活用の重視

仮説、店で働く人の努力については、見学し、観察した結果を絵、写真等にあらわさせる。

検証、観察結果を絵図に表現し、検証の中心資料とすることは、児童が学習に積極的に参画し、作品を相互に活用して課題を追求することで、学校教育目標の「仲よく助け合う」生活態度を培うことになる。

発展、作文の中で「わたしは、今まで食べものに好き嫌いがあったけど、これからいわないようにする。買い物に行ってみたい」といっている。これは学校教育目標の「すすんで学び、みんなで生活を創造する」を生かした証左となる。

このように、学習過程に学校教育目標が具現されていることが必要である。

#### (イ) 児童生徒を理解するには

教育は人間をつくることであり、そのためには児童生徒の性格の欠陥や知識の遅滞を除去するために、ありのままの人間を知らなければならない。そのためには、授業者は学級の児童生徒の実態をつかんでおかなければ眞の授業にはならない。

#### (1) 学級の児童生徒の実態をつかんで

ありのままの児童生徒を知るために、最低の必要条件として、知能、学力、長所、短所、身体的異常、家庭環境、指導方針、観察事項等を「学級児童生徒一覧表」にまとめ、その児童生徒の姿がわかるようにして授業者全体に知ってもらう必要がある。特に、観察事項については、授業者全体の観察を総合した総合所見や個々の児童生徒の動向がわかるようにすることがたいせつであろう。

・ 指導配慮生徒をつかんで

的確な生徒理解に基づく指導のために、知能検査、学力検査、AAIの結果を有効に利用した「指導配慮児童生徒一覧表」があげられる。

授業時は、学級全体の児童生徒に目を向けることは困難であるから、特に学習意欲がない、学習上問題をもつアンダーアチーバーの児童生徒に目を向け、少しでも意欲的に教いあげて学習成立を図ろうとするが、「指導配慮児童生徒一覧表」である。

形 式

○○教科指導配慮生徒一覧表					年 組	
氏名	知 能	学 力	A A I			学習指導上の配慮事項
	偏差値	偏差値	態度	技能	環境	
座 教 卓						
席 表						

◦ 学習指導においては、

- 本時の指導に ① 指導配慮児童生徒を位置づける。（上の表の要領で、座席配置図も）  
 ② 生徒指導上の努力点として、配慮児童生徒を留意して指導する。

◦ 指導過程では、

- ア 問題意欲      • 資料をよく読み、自分なりの意見をもって授業に臨ませる。  
 イ 小集団による協力      • 司会者はみんなの意見をききただし、グループとしての意見をまとめさせるようにする。  
                         • 今日の発表者はメモをとりながら発表の準備をし、班代表の自覚をもって発表させる。  
                         • グループの話し合いで積極的に次時の課題が考えられるようにする。

このような流れの中で、配慮生徒については、

- 配慮生徒Aについては、自分なりの考えをもって進んでグループに参加させ、考え方を述べ、人の意見を聞かせる。
- 配慮生徒Bについては、人の意見をよく聞き、そのうえで、自分の考え方をまとめせるようにする。

・配慮生徒Cについては、グループで自分の考えが述べられ、決して応答できるようにする。など。

授業中は、配慮児童生徒の座席を確認しておき、机間指導やグループ学習の折に意欲的に個別指導を行なうことにより、学習上問題をもつ生徒も学習の成立がみられる。

#### イ 授業時における生徒指導

ここでは、これから授業時において、どういう考え方で指導していくことがたいせつかを考えてみたい。

##### (ア) 自己理解ができる能力を育てる指導

毎日の授業の中で、児童生徒が正しい自己理解ができるような能力を育てるように配慮しながら行なうふうが必要である。正しい自己理解をするためには、児童生徒が自己の長所や短所、自分のとりまく環境などを知って、自己受容し、自分をあらゆる角度から見直してみることがたいせつである。

授業の中で、児童生徒の長所（能力・個性）を引き出して伸ばすためには、

ア 学習形態の改善をする。 個別学習やグループ学習をとり入れる。

イ 指導法の改善をする。 学習を意欲的にさせ、長所を認め、励ます指導を生かす。

ウ 教師の協業体制をつくり指導する。 諸検査等から児童生徒の実態を科学的に理解する。間接観察と、学習活動における思考のつまづきや態度の変化などによる直接観察により、個の児童生徒の指導方策を手がかりに指導にあたる。

などによってすすめ、可能性を引き出す教育、生かす教育を行う必要があろう。

##### (イ) 自己指導力を身につけさせる指導

自己実現が児童生徒の最終目的とすれば、そのためには自己指導の発達が必要になる。自己指導は、「自己自身の目標を選択し、自己自身で決定をする」ことであり、そのためには自己自身および自己の行動について責任のとれる能力あるいは独立性、自己受容、自己理解を前提としているものであるからその助成のためには、自発性、自律性、自主性を促進しなければならないと考える。

自発性は、欲求や情緒が自然のままに発現して、素直に外部的行動として表現されることであり、授業の中で育てるためには、動機づけを考えておくべきである。そのくふうとしては次のようなことが考えられる。

ア その方向に動機づけられるような場を設定する。 教師が話し、説明をとおして、その方向を意図する方向に向ける。あるいは、一定の方向をもった教材・教具・施設を整える。

イ 一時間の学習の目的を強く意識させて、その方向に動機づけられるようにする。指導上の過程にはっきり位置づける。

ウ 学習問題解決についての必要感を刺激し、それに向って動機づけられるようにする。

エ 児童生徒のうちから、目的に向うようなものを特にとりあげてそれを奨励するように動機づけるなど。

特に留意したいことは、劣等感を除去し、成功感、自信をもたせるようにする。方向づいた意欲が持続していくためには、その成功を刺激することが中心である。学習の進行に伴って適当に激励したり、目的達成に近いことを知らせたりする。学習は予測が計画に基づいて継続して積み重ねていくのであるから、思うように進まないことや失敗もあるので、それにくじけないだけの努力、根気、持続性をうえつけてやる必要がある。

自律性は欲求の充足を制止、あるいは情緒の表出と制止が自発的に行なわれることである。自律性を育てるためには、幼少の時は他律的しつけがあるが、学校生活に入つては児童生徒が相互に尊敬を感じ合う集団生活が営なまれるようにすれば自律性は発達するといわれている。授業面では児童生徒の欲求を即時充足する教育ばかりでなく、時には欲求充足の遅延を学習させ欲求不満に耐える経験を積み重ねさせ、困難な限界状況に身をおかせ、それに耐えさせ、自分で克服していくような適切な場面を設定することにより、内面的な自己指導を育てるように心がけるべきである。

自主性は、他人に依存することなく、独立した判断をくだし、その判断をもとに、自由意志で実践していくことである。自主性は自発性、自律性の基礎のうえに発達していくものであるから、基礎がひよわなものでは自主性も健全なものに発達しない。

授業中に自立性を伸ばすようにするには、その時間の目標を明確に知らせたり、資料を読んで自分の意見をもって授業に臨ませることにより自発性を生み、「小集団の中などで他人の意見を聞き、さらに自分自身の意見をもって決断できる」ようにする。また机間巡回をして困難にあっている時にはつまづきを援助し、激励し、解決したことは小さなことでもほめて自信をつけ、苦心して学習した結果が、「よかった」という成功感をもたせるようにすることも一つの方法だろう。

指導過程で創造性を育てるには、仮説と検証の二つを大きな段階として必要とする。それを基本としてその学習過程を示すと、①問題意識をもつ ②仮説を立てる ③検証して法則化する ④適用するようになろう。しかし指導過程では、教科の特性、教材のもつ内容、学習形態により異なり、一律固定的なものではない。

数学科について例を示すと、

- ① 課題のはづき — 事象を数理化し学習の必要性を喚起し、問題場面をはづきし、解決すべき課題に立ち向う意志をもたせる。
- ② 仮説の設定 — 課題について多角的に推論をはたらかせ、質の高い仮説を選択し決定する。
- ③ 仮説の検証 — 解決の見通しをたて、仮説の妥当性を論理的に追求する。
- ④ 課題の解決 — 検証により仮説が真であるとき課題は解決し、解決した命題を一般化する。
- ⑤ 適用 — 課題解決の手順を習熟し、定着化をはかり、他の場面へ拡張・適用できるようにする。

という過程でひとりひとりの生徒の自己実現、自己開発いわゆる自発性の原則を生かし、自

分の力でしらべ、直観し、検証し、適用していく、教師はその活動をよりよい方向へ向け、援助し、激励していく形が中心となる。

(ウ) 人間関係を育てる。

現代の社会では、科学の進歩、経済の安定、生活の合理化、能率化などにより生活は一丸化され、社会の流れもスピード化して、自分のことで精一杯となり、他人のことなど無関係になりつつあり、人間関係が無視されようとする傾向がみられる。

ア　学校においても友人関係が成績だけの競争相手と化しつつある傾向がみられるので、授業時には必ず協力学習や共同学習などのグループ学習を取り入れ、グループ学習のよさを味わせ、人間相互の依存関係を経験させ、お互いに相手の立場を考えて仲よく助け合って生活できる人間づくりを指導する。

イ　授業時においては、「自分さえ、自分だけ」という甘い考え方で、自分勝手な言動をしたり、他人に迷惑をかけたり、忘れ物をすることをしないようじゅう分指導することが必要である。

#### (4) 問題を通した生徒指導

毎日の全教育領域の営みにおいて、前述のように、積極的な意味での生徒指導を機能として行ってきているわけであるが、大変残念な事に、社会情勢、家庭環境等の影響も加わり、問題行動を起こす生徒も多発してきている状態である。

しかし、この問題行動の解決についても、前述のような、生徒指導本来の考えに基き、その本人の問題行動を起こさざるを得なかった気持をよくくみとり、今後の自己変容をいかにきたすかを考えて指導していかなくてはならない。この項では、次の2つの事例をもとに考えていきたい。

##### [事例 I] いろいろな問題行動を起すO男

(1) 問題を持つ生徒

O男 中学3年生 男15才

(2) O男の問題行動

中学1年生のころはゲームセンターの出入りが多く、たびたび、注意された程度であったが、2年生の3学期、同学年の生徒達とグループを作り、デパートを中心に集団万引をした。3年生になってから、とくに問題行動が多発してきた。同校先輩（姉の友人、私立高校中退）とバイクの無免許運転、飲酒、喫煙、シンナー、また、同級生とグループになり、校内における暴力、金銭のまきあげ等の反社会的な行為をくり返してきた。

ただ一つの教いは、卒業間ぎわになり、自分の進路（千葉県の食堂への就職）もきまり、将来に対して、希望を持てるようになり、精神的にも落ちつき、卒業式の後、自分の方から、あいさつに来て、自分の進路への希望を語っていってくれたことである。

(3) 本人の状況

(ア) 性格、自己中心的で、他人の事は考えない。さまざまな約束ごとを、自分から破り平気

である。ただ、自分の興味のむくものには、時と、所を忘れて、熱中するところは持っている。

(1) 学業成績と学習態度

偏差値（教研式45）

能力は普通であると思われるが、学習意欲なく、成績は1と2がほとんどである。とくに、英語、数学等、日常の努力を要する科目は不得意である。ただ、美術には興味を持ち、作品のできもよい。

(2) 家庭環境 父（大工） 母（パートで工場づとめ）兄（飛行機の整備士、別居中）姉（私立高校・3年生）

父は普段、静かであるが、やゝ、酒気臭味であり、飲むと、大声で説教する。兄には尊敬の念を持っており、また、よく言う事を聞く。

(4) O男の指導

(1) 家庭との連携

O男は父親に対して、はげしい、反感を持っており、問題行動の誘因になっているようなので、家庭訪問を多くし、父親との接触を多く持ち、O男に対する気持ちや当たり方を変えるよう話し合った。そして、また親へのO男の気持ちをよく話し合い指導した。とくに、兄には、尊敬の念を持っているようなので、帰足の折りには話し合い兄の指導を頼んだ。

(1) 本人に対する指導

1) 学級担任による指導

個人面接を多くもち、一日一声はかけるようにし、欲求不満の解消と認められたい気持ちを満たしてやる心掛けた。また、ともするとのはずれがちな学級集団の中へ入れ、連帯感を持たせるようにし、また、学級の生徒へも働きかけた。

2) 生徒指導主事による指導

事件発覚 A 事情聴取 B 叹責（説諭） C (反省?) C 再犯のきまりきったサイクルを、くり返す中で、叱責も大切であるが、Cにおける、定期的、意図的かつ継続的な教育相談に力を入れた。

3) 全校職員による指導

学年会、職員会において、一つのケースとして、とくに、教科にでる先生に対して、O男に対する共通理解を図り、共通な対し方（授業中、必ず指名する等）を考えた。

5) O男の指導を通して考えたこと。

(1) 問題行動に対する説諭の後の継続的な面接を行い、ラポート作りに専念し、本人の気持ちを受け入れてやりながら、本人の個の変容を援助していく事が大切である。

(1) 問題行動の誘因として、家庭における人間関係の障害が大きく考えられるので、親へのカウンセリング、（家庭が問題行動に対して、無関心であると処理しがちであるが、実状は

どう処置していったらよいか、暗中模索である事が多いので)が必要であり、家庭とともにという気持ちをお互いにしっかりと持つことが大切である。

- (a) 学校の体制の中で、共通理解の場と時を多くとり、どの先生方も考えている「迷える生を救うための方法をいろいろと話し合い分担すること。
- (b) 学級担任の先生を中心にして、また、学級王国におちいる事なく、他の先生方も、しらぬふりをしながら、また、ワンクッションを持ちながら生徒に対することも必要である。
- (c) 先輩(卒業生)・他校生とのつながりをよく連絡しあえる体制・校外での生活についての指導体制も大切である。
- (d) 非行対策の消極的な生徒指導より脱皮し、つねに、学習指導、学級指導、生活指導等の教育分野にわたり、「個の確立」への援助をする。積極的な生徒指導を、全校的な体制で研究していくべきである。

#### [事例Ⅱ] 家出・不純異性交遊をするN子

1 問題をもつ生徒 N子 中学3年生 女子 15才

2 N子の問題行動

中学2年頃から、無断欠席、ごまかし早退、無免許運転車に同乗、有職少年との不純異性交遊等々、中学生としては目に余る行為を重ね、中学3年4月に県立教護院に入所、同年8月、同施設を無断外出し、以後、関係者の説得にもかかわらず教護院に帰らず指導措置が解除されないまま、出身中学校を卒業する。

3 本人の状況

- (1) 性格……自己中心性が強く、無気力で、劣等感をもち気分が変わりやすい性格(衝動的性格)他人の意見には常に偏見をもって聞き、善悪の判断があいまいで、自分の行為が指摘されると、その場をごまかし、自分の非を正当化してしまう。
- (2) 学業成績と学習態度……学習意欲はなく、基本的な理解に欠ける。

教科の評価は、殆んど1である。 知能偏差値 29

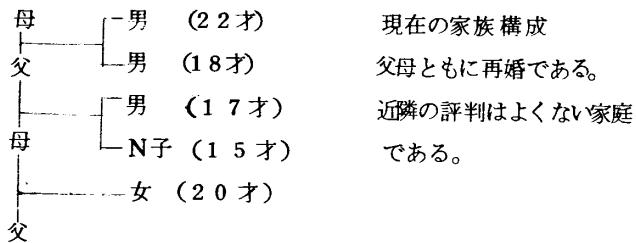
ただし授業防害などはしない。 学力 // 国一 36

(3) 健康状態……小学校5～6年頃から月経困難症、卵巣機能不全 数一 34

のため、毎月、生理前後一週間程度病休をとる。

中学2年の春、右卵巣のう腫摘出術を行なう。その後も月経困難症はおさまらず本人を苦しめていた。

- (4) 家庭環境……両親とも健在だが父は仕事嫌いな面があり、母親は、無知で、あまやかし型である。経済的には、準要保護家庭であり、しかしながら、兄たちが三人も働いているので、やり方によっては、そう困らないはずである。兄たちは、生活態度も悪く、N子に対し、説得力をもっていない。



#### 4 N子の指導

- (1) 家庭との連携……親と教師の信頼関係の確立が第一と考え、日夜かまわざ訪問し、親の相談相手になれるよう努めた。こういう家庭には、たてまえ論は通用しないので、親の気持ちを察してあげ、一緒に心配するかたちで、接触していった。結果的に、家族ぐるみ、私の指導を受け入れてくれ、かなり家族関係の改善にくい入ることが出来た。
- (2) 本人に対する直接指導
  - ・教育相談係による指導……N子にとって、相談室は、安心できる場所であったが、温室的な雰囲気でしかなかったようだ。
  - ・担任教師による指導……毎日交換日記を継続し、生活指導を重視した指導をおこなった。学級生徒に対し、協力を要請し、N子を温かく受け入れてくれるよう配慮した。
- (3) 本校全教師による指導……N子にどうかかわっていくかのケース会議の開催（学年、全職員）校外指導による早期発見－情報交換を密に行なった。校内生活においても、N子の行動に不思な面が見られればすぐ関係者に情報が流れるようになった。
- (4) 関係機関との連絡提携
  - ・地区民生委員（児童委員）さんにも相談し、家庭への働きかけの援助を要請した。
  - ・市教委教育相談担当主事の先生にも相談し、N子の指導についてご指導を受けた。
  - ・県南児童相談所の心理判定員・児童福祉吏さん等のご指導も受けた。
  - ・産婦人科専門医に相談し、病気の心の動よう等についてご指導を受けた。

#### 5 N子の指導を通して考えたこと

- (1) 性教育の充実・強化の必要性を望む。
 

性教育の基礎は家庭にあるといわれるが、家庭においてなされていない現状では、小中学校において、発達に応じた計画的な指導が必要である。思春期における性的な過激行為は、両親との人間関係が疎外された場合が最も多いので、親に対しての指導も忘れてはならない。
- (2) 家庭との連携
 

青少年の非行は、家庭における人間関係の障害に主たる要因を求めることが出来るので、学校と家庭との連携をどうはかっていくかが重要なことである。これについては、PTA

どう処置していったらよいか、暗中模索である事が多いので)が必要であり、家庭とともにという気持ちをお互いにしっかりと持つことが大切である。

- (イ) 学校の体制の中で、共通理解の場と時を多くとり、どの先生方も考えている「迷える羊を救うための方法をいろいろと話し合い分担すること。
- (ロ) 学級担任の先生を中心にして、また、学級王国におちいる事なく、他の先生方も、じらぬふりをしながら、また、ワンクッションを持ちながら生徒に対することも必要である。
- (ハ) 先輩(卒業生)・他校生とのつながりをよく連絡しあえる体制・校外での生活についての指導体制も大切である。
- (ニ) 非行対策の消極的な生徒指導より脱皮し、つねに、学習指導、学級指導、生活指導等の教育分野にわたり、「個の確立」への援助をする。積極的な生徒指導を、全校的な体制で研究していくべきである。

#### [事例Ⅱ] 家出・不純異性交遊をするN子

- 1 問題をもつ生徒 N子 中学3年生 女子 15才
- 2 N子の問題行動

中学2年頃から、無断欠席、ごまかし早退、無免許運転車に同乗、有職少年との不純異性交遊等々、中学生としては目に余る行為を重ね、中学3年4月に県立教護院に入所、同年8月、同施設を無断外出し、以後、関係者の説得にもかかわらず教護院に帰らず指導措置が解除されないまま、出身中学校を卒業する。

#### 3 本人の状況

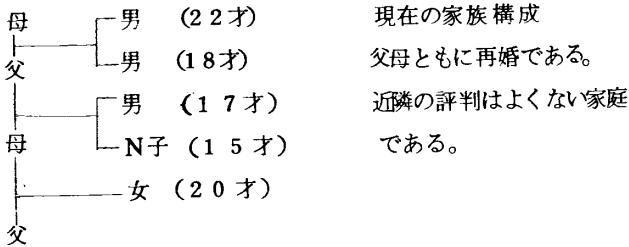
- (1) 性格……自己中心性が強く、無気力で、劣等感をもち気分が変わりやすい性格(衝動的性格)他人の意見には常に偏見をもって聞き、善悪の判断があいまいで、自分の行為が指摘されると、その場をごまかし、自分の非を正当化してしまう。
- (2) 学業成績と学習態度……学習意欲はなく、基本的な理解に欠ける。

教科の評価は、殆んど1である。知能偏差値 29

ただし授業防害などはしない。学力 " { 国一 36

- (3) 健康状態……小学校5～6年頃から月経困難症、卵巣機能不全  
そのため、毎月、生理前後一週間程度病休をとる。  
中学2年の春、右卵巣のう腫摘出術を行なう。その後も月経困難症はおさまらず本人を苦しめていた。

- (4) 家庭環境……両親とも健在だが父は仕事嫌いな面があり、母親は、無知で、あまやかし型である。経済的には、準要保護家庭であり、しかしながら、兄たちが三人も働いているので、やり方によっては、そう困らないはずである。兄たちは、生活態度も悪く、N子に対し、説得力をもっていない。



#### 4 N子の指導

- (1) 家庭との連携……親と教師の信頼関係の確立が第一と考え、日夜かまわず訪問し、親の相談相手になれるよう努めた。こういう家庭には、たてまえ論は通用しないので、親の気持ちを察してあげ、一緒に心配するかたちで、接触していった。結果的に、家族ぐるみ、私の指導を受け入れてくれ、かなり家族関係の改善にくい入ることが出来た。
- (2) 本人に対する直接指導
  - ・教育相談係による指導……N子にとって、相談室は、安心できる場所であったが、温室内な雰囲気でしかなかったようだ。
  - ・担任教師による指導……毎日交換日記を継続し、生活指導を重視した指導をおこなった。学級生徒に対し、協力を要請し、N子を温かく受け入れてくれるよう配慮した。
- (3) 本校全教師による指導……N子にどうかかわっていくかのケース会議の開催（学年、全職員）校外指導による早期発見－情報交換を密に行なった。校内生活においても、N子の行動に不信な面が見られればすぐ関係者に情報が流れるようになった。
- (4) 関係機関との連絡提携
  - ・地区民生委員（児童委員）さんにも相談し、家庭への働きかけの援助を要請した。
  - ・市教委教育相談担当主事の先生にも相談し、N子の指導についてご指導を受けた。
  - ・県南児童相談所の心理判定員・児童福祉吏さん等のご指導も受けた。
  - ・産婦人科専門医に相談し、病気の心の動よう等についてご指導を受けた。

#### 5 N子の指導を通して考えたこと

- (1) 性教育の充実・強化の必要性を望む。
 

性教育の基礎は家庭にあるといわれるが、家庭においてなされていない現状では、小中学校において、発達に応じた計画的な指導が必要である。思春期における性的逸脱行為は、両親との人間関係が疎外された場合が最も多いので、親に対しての指導も忘れてはならない。
- (2) 家庭との連携
 

青少年の非行は、家庭における人間関係の障害に主たる要因を求めることが出来るので、学校と家庭との連携をどうはかっていくかが重要なことである。これについては、PTA

活動の一環としての積極的なとりくみを望みたい。教師も通り一ぺんの家庭訪問でなく、誠意をもって、親の相談に応ずる心まえを持つべきであろう。

(3) 非行対策的生徒指導から、より積極的な生徒指導への転換を望む。

生徒指導で適応を図りながら、一方では教科指導が適応を妨げるという結果を生んでいる場合さえ考えられる。教科指導の改善を図ることに対応した生徒指導の充実を図ることが望まれる。それは非行対策的な生徒指導でなく、学校生活の充実化をめざしたひとりひとりへの援助指導（自己実現への指導）こそ重視しなければならないと考える。

(4) 教師への提言

生徒は学校集団ばかりでなく、いろいろな集団において社会的関係をもっている。学校は社会から閉ざされた集団ではない。したがって、必要なときには必要な機関や団体との協力関係をもつという柔軟な考え方と姿勢が大切なのである。我々教師も、学校の外へ向かっての関心と知識を持つ必要があろう。

(5) 家庭との連携

(1) 家庭との連携の必要性

児童・生徒ひとりひとりの人間形成の過程は、幼児期や児童期において、親や他の行動様式の模倣や同一化をもとにしてはじまり、望ましい教育によりやがて自覚的存在として重要な価値を選択し追求できるようになる、ということが言われている。そこで特に基本的な生活習慣や態度は、幼児期において、各家庭を基盤として育成され身につけられたものである。したがって児童生徒のひとりひとりが身につけたものが本当に望ましいものであるかどうかは、各家庭、言いかえれば、家庭教育に負うところが極めて大きいと思われる。

近年経済界の著しい推移変動の中で、児童生徒の望ましい成長発達を阻害する非行の激増が言われ、触法行為の低年令化、そして多発化の傾向があると伝えられている。

そこで、最近特に、家庭教育の荒廃が叫ばれ、社会教育や学校教育に対する批判や要望が高まっている。学習指導要領にも「平素から個々の生徒についての理解に必要な資料（たとえば、個人記録、家庭環境、地域環境などの資料）を豊富に収集するようにしあなたな指導となること。なお、個々の生徒に対する指導の徹底をはかるためには、生徒の家庭との連絡を密にし、教育相談（進路相談を含む）などを、計画的に実施することが望ましい」と学級指導の中に明示され、家庭との連携が個々の生活の指導上重要なことが述べられている。

(2) 家庭との連携のねらい

ア 生徒指導をすすめるための実態のはざみ

教師は、児童・生徒のひとりひとりをのばすためには、個々の生徒の実態や父母の願いを十分には握していないなければならない。すなわち、ひとりひとりの児童・生徒は生活の場としての家庭があり父母の存在がある。個々の児童・生徒は家庭という比較的開

放された場で生活し、それぞれの父母は、わが子を通して教育に対する要望をもっている。教師はこれらの実態を十分に握り理解したうえで、生活指導の方針、目標、努力点、具体策等を設定しなければならない。

#### イ 教師の意図への協力を求める

父母に教師の意図しているところとか現状を十分理解してもらう。また場合によっては生徒への指導に協力を求めまた協力を得ることによって指導の効果をあげることができる。

#### ウ 父母の意見を聞き、相互に情報を交換し合う。

実際の指導を進めていくなかで、父母会やその他の機会を通じて、父母の意見や考えを十分に聞き、それをひとつの指導資料として実際の指導の中に生かしていくことが指導の定着を図るために必要なことである。

また個々の生徒の学習、性格、行動、交友、健康、能力などの情報を父母、教師相互に交換し合い、理解を一層深め、その中から児童・生徒の個性や能力を発見し、今後の指導の資料とすることが必要である。

#### エ 父母・教師が一体となった教育観をもてるようする。

学校・家庭が一つの方針のもとに、一致協力して指導を進めていく時にははじめて効果があがるものである。父母はとかく自分の子どもの考え方や行動を通じて教育の問題を考えるが、さらに学校・地域といった広い視野で教育をとらえ、また次の世代を育成する立場から教師と父母が教育の問題について話し合い研究を深めていくことが望ましい。

#### オ ふだんから教師と父母との人間関係を深め高める努力をする

教師と児童・生徒、父母が相互に信頼し合い、なんのわだかまりもなく話し合える人間関係がつくられることが大切である。教師と父母、さらには父母相互の人間関係が望ましいものであるところに教師と生徒および生徒相互の人間関係がよりこまやかなものになってくる。生徒指導を進めるための家庭との連携の基盤は、このような教師と父母の望ましい人間関係づくり、信頼関係づくりがはかられていなければならない。

### (3) 家庭との連携を図るための具体的な計画(例)

#### ア 内 容

- (ア) P・T・A学年部会 (学級P T A会・授業参観も含めて)
- (イ) 三者懇談 (父母、児童・生徒、教師面接)
- (ウ) 父親学級 (進路問題・性教育問題、生活指導 等)
- (エ) 地区別懇談会 (P T A主催等)
- (オ) 地区別校外生活指導
- (カ) 家庭訪問 (家庭環境調査等) 定期的、不定定期
- (キ) 学年・学級通信

#### イ 計 画

月	父 母 会	個別面接	学年・学級通信	そ の 他
4	学年父母会 学級父母会	長欠生徒の 家庭訪問	・学校・学年・学級の指導方針 や目標 ・年間行事予定について	・家庭環境調査票 ・連絡網、町内別 生徒会の作成
5	・学級父母会 と懇談会 (授業参観を かねて)	・全校家庭 訪問(約 一週間)	・家庭学習のあり方 ・健康診断結果について	・健康診断の結果の 通知
6	・P T A父親 学級(進路 とか生活指 導の問題に ついて)	・呼びかけ 相談(今 までの生 活を見て 特別生活 の )	・入学・進級2ヶ月後の学級生 活とか学校生活について ・部活動について	・体力測定の結果の 通知
7 8	・P T A、 校外生活 指導参加 ・地域別懇 談会	家庭訪問 (特に問題 もつ生徒の 個別指導を)	・一学期の反省と夏休みのすご し方(特に夏休み中の生活指 導についてくわしく具体的な 内容で)	・夏休みを迎えて、 学校より各家庭へ 「父母へのおねが い」プリント配布 成績表 ・水泳クラスマッチ
9	・学年父母 会 ・学級父母 会		・夏休みの反省と二学期の予定	
10	・P T A父 親学級 (性教育等)	・父母面接 (三者懇談)	・中学生の心とからだについて	・運動会

11	・授業参観と懇談会		・子どものしきり方とほめ方 ・体育的、文化的行事について	・音楽コンクール等の学校行事への参加
12	・学級父母会		・二学期の反省と冬休みのすごし方（特に新年をむかえるに当っての心構え等について）	・冬休みを迎えて学校より家庭へ
1	・学年・学級父母会	・父母面接（三者懇談）	・冬休みの反省と三学期の予定 ・入試について（3年）	
2	・PTA講演会（研修）	・父母面接（〃）		・立志式（1・2年生）参加
3	・学級父母会	・父母面接	一年間をかえりみて	春休みを迎えて
備考	・PTA活動との連けいとる	問題生徒の訪問を随時に	学年により内容に変化を、	親の学校行事への参加ができるだけ呼びかける。

三年生については、特に「進路指導」についての計画をおこなうことが必要である。研修会的なものについては、PTAの研修活動と関連させるとよい。

とにかく家庭との連けいは、問題行動が発生してから必要なのではなく、教師が意図的計画的にしかも平常の生活の中で積極的にすすめられることが最も重要なことである。

#### (6) まとめ

以上のように生徒指導の理念を求めながら二、三の積極的な生徒指導の実践例や消極的な生徒指導の事例を通して生徒指導はいかにあるべきであるかを追求してきたわけであるが、また不十分であるため、みなさんのご指導を得てさらに生徒指導の充実強化を図っていきたいと思う。究極的には生徒同士がお互いにささえ合い、助け合いながら、やがて自己実現ができるよう援助指導することが生徒指導に課せられた大きな任務であると思われる。最後に本研究のためご指導いただいた少年指導センターの方々に深く感謝の意を表します。

## 評

この論文は、少年指導センターで研修を積んでいる5人の生徒指導主事の先生によって書かれたものである。児童生徒指導の目的を的確にとらえ、人間観の問題にふれるなど児童生徒指導の本質に迫ろうとしている。そして、学級担任の役割や具体的な指導方法を示すとともに、授業における児童生徒指導のあり方など今後とも充実強化していくなければならない面が詳細に述べられている。非行の事例もあげられているが、非行対策的生徒指導よりも生徒の自己実現を目指して積極的な生徒指導への転換の重要性が指摘されている。実際、学び方学習や学力向上対策等によって非行を消滅させた学校があるのは、結局、授業時に児童生徒指導の機能を発揮させることによって、知育が本物となり、ひいては非行対策にもつながったのではないかろうか。

家庭や関係機関との連携は、欠かすことのできない重要なものである。計画等も述べられているので参考となろう。教師と父母との信頼関係が強調されているが、教育相談的态度で接することが大切である。「智に働きば角がたつ……。」知・情・意が統合されたとき、日本人に合った児童生徒指導が行われるのではなかろうか。時計の振り子は、どんなに大きくゆれても、どんなに小さくゆれたときでも必ず通らなければならないところがある。教育においても、どんなに時代が変わっても、考え方が変わっても、変わってはならないものがある。それは何か。それは「人間尊重の精神」であろう。児童生徒指導もここを基盤としないかぎり、全職員の共通理解は得られない。これこそ児童生徒指導の原点であろう。そして「人間尊重」を具現化する過程においては、「人間性の理解」や指導技術が必要になってこよう。